

美術工芸研究室 工芸

興福院こんぶいんのふくさ及び東大寺図書館の厨子

研究所発足以来、工芸室は研究所の主旨に添い工芸室のテーマをもつて調査研究を続けている。調査地区は地理的關係から近畿地区を第一段階としているが、依頼調査は許される範囲において依頼者の要望にこたえて出張調査を行った。

工芸室の調査物件の主なるもの記せば、以上の如くである。

昭和28年7月	千体寺の厨子	大和郡山形丹後庄千体寺
" 8月	天川社の能衣裳、能面	奈良県吉野郡天川村天川社
" 12月	能衣裳、能面	伊勢市一色町、通町、馬瀬
昭和29年6月	春日神社能衣裳	岐阜県関市春日神社
" 8月7月	唐招提寺総合調査	奈良市五条町唐招提寺
昭和30年8月7月	西大寺総合調査	奈良市西大寺町西大寺
昭和31年7月	興福院ふくさ	奈良市法蓮町興福院
" 12月	東雲神社能衣裳、能面	愛媛県松山市東雲神社
昭和32年7月6月	唐招提寺舍利塔とレース	奈良市五条町唐招提寺
" 9月	東大寺舍利塔	奈良市雑司町東大寺
昭和32年10月	知足院厨子	奈良市雑司町東大寺知足院

興福院ふくさ及び東大寺図書館の厨子

"	東大寺図書館厨子	奈良市雑司町東大寺図書館
"	江戸小袖	京都市中京区小川通夷川上ル田畑起竜郎
11月	千体薬師厨子	奈良市法蓮町興福院

今回紹介を試みる作品は興福院のふくさと東大寺図書館に保存されている厨子である。

これらの作品は、その製作の優秀さはもちろんであるが、それに加えるに、これらの作品の類例が殆んど他に見られないことで、まことに貴重な資料といえよう。かかる意味において、この二点の紹介を撰んだ。

一 興福院ふくさ

興福院の什物として伝えられている参拾壹枚のふくさは、ふくさの資料としてまことに貴重な作品といえよう。この興福院ふくさは、いわゆるかけふくさで進物などの上に覆いかけるものである。

ふくさは織紗、服紗、袱子などいろいろの文字が当てられているが、その語源やその発展過程についてはいまだ定説がない。しかし、染織工芸品は、その発生は殆んど実用に立脚し、やがて装飾へ移行する一般性から考えて、はじめは塵をよけるため覆紗したことからやがて美

的景観を添えるかけふくさの出現にまで発展したとも考えられよう。

興福院ふくさは、江戸初期の後期に属する作品で、すでに装飾的な要素を多分にもつたふくさになっている。先づ作品を紹介すると、

白綸子地枝垂桜丁字袋献花文様刺繍紗	タ、 E II 1.67R×1.71R
赤緞子地猩々文様刺繍紗	1.67R×1.71R
紅綸子地羽子板楽寿文字入文様刺繍紗	1.67R×1.71R
縹緇子地銚子盃草花長生文字入文様刺繍紗	1.67R×1.7R
鬱金緇子地梅花末広宝袋楽寿文字入文様刺繍紗	1.6R×1.7R
薄縹緇子地丁字袋熨斗南天若松万歳文字入文様刺繍紗	1.67R×1.73R
白綸子地柳葦分舟文様刺繍紗	1.66R×1.67R
黄茶緇子地中啓花籠万歳文字入文様刺繍紗	1.65R×1.7R
白綸子地枝垂桜宝袋熨斗文様刺繍紗	1.7R×1.7R
縹緇子地牡丹反物宝尽し宝寿文字入文様刺繍紗	1.66R×1.7R
白緇子地銚子熨斗菊花福貴文字入文様刺繍紗	1.68R×1.71R
薄紅緇子地熨斗秋草文様刺繍紗	1.68R×1.67R
紅綸子地籠菊花千秋楽文字入文様刺繍紗	1.66R×1.7R
紅綸子地門松俵万歳楽文字入文様刺繍紗	1.68R×1.7R
薄縹緇子地橘南天熨斗繁昌文字入文様刺繍紗	1.68R×1.7R
紅緞子地島台寿文字入文様刺繍紗	1.69R×1.69R
紅綸子地花活福貴文字入文様刺繍紗	1.66R×1.7R
紅緇子地梅宝尽し万寿文字入文様刺繍紗	1.66R×1.71R
黄茶緇子地梅花宝尽し福寿文字入文様刺繍紗	1.66R×1.7R
白緇子地瓶子銚子つゝじ楽寿文字入文様刺繍紗	1.68R×1.7R

第一図 興福院ふくさ

白綸子地 献花活花团扇文様刺繡紗	1.68R × 1.69R
白綸子地 中啓松竹宝尽し文様刺繡紗	1.67R × 1.7R
薄縹緞子地 若松宝尽し寿文字入文様刺繡紗	1.69R × 1.7R
赤緞子地 宝船中啓千歳文字入文様刺繡紗	1.7R × 1.7R
鬱金縹子地 枝垂桜茶釜献花文様刺繡紗	1.65R × 1.7R
白緞子地 松竹宝船文様刺繡紗	1.67R × 1.7R
赤緞子地 ばら花反物宝尽し宝寿文字入文様刺繡紗	1.7R × 1.7R
赤緞子地 ばら花反物宝尽し宝寿文字入文様刺繡紗	1.7R × 1.7R
赤縹子地 橘反物熨斗万歳染文字入文様刺繡紗	1.7R × 1.7R
赤縹子地 大根宝尽し果物万歳文字入文様刺繡紗	1.7R × 1.7R
鬱金縹子地 熨斗宝尽し小袖福寿文字入文様刺繡紗	1.67R × 1.69R

これらの参拾毬枚のふくさを見ると、ふくさには刺繡を施すべきものと云う観念が強く感じとられるように、見事な刺繡がなされている。これは、ふくさの用途が多分に格式ばった用途に用いられるようになったため、他の文様染や織物に比べて刺繡のもつ表現効果が高くなったためであろう。

殊に、この参拾毬枚のふくさは、徳川五代將軍綱吉が彼の側室であつた瑞春院に祝儀のたびごとにおくつたものであり、これを興福院五代の住職誓誓が正徳三年に江戸へ伺候した時に瑞春院から直接に拝領したという由緒がある。江戸初期において徳川將軍家と特殊な関係をもつに至り、寺内の最高の場所に歴代將軍の廟所まで建立している興福院に、これらのものが伝えられていても別に不思議はないが、地区が南都だけに些か興味を引く。

五代將軍綱吉は延宝八年八月に將軍職につき宝永六年正月に歿するまで約三十年間將軍として君臨したが、その間の天和、貞享、元禄、宝永時代は染織史上まことに華かな時代であつた。したがつて、興福院ふくさは宝永六年までに製作された作品であることが知られる。

ふくさの生地は江戸初期頃から漸く一般の衣服用に使用されるようになった綸子、緞子、縹子の三種類に限られ、その地色も赤系統が最も多く白がそれにつぎ、青系統と鬱金色、黄茶色となつているが、これも時代の好みが反映したものであろう。参拾毬枚とも寸法は、ほぼ同じであり裏は一枚の例外もなく紅絹がつけられてある。

文様は四季の花を主材としたものが多く、それに吉祥文様や縁起のいい言葉や文字に出したものもあり、これらを多彩な色糸や金糸で、精巧緻密に些かの破綻もみせず鮮かに刺繡しているのには誰れしも驚嘆の他はない。わが国における刺繡の発達は早く、すでに飛鳥時代からの作品を残しており各時代によりそれぞれの技術発展は見られる。然し殊に、室町末期から桃山期にわたつて小袖の表着えの進出と能衣裳の発生発展に伴つて、それらに刺繡を施す必要性は繡技の発達をうながさざるを得なくなり刺繡技術の非常な発達がみられるにいたつた。更に、江戸期に入つては、繡技の変化と技術の洗練化へ進む傾向を示してくる。興福院ふくさにはそのような情勢もみられ、どの作品も仕上りはまことにすつきりとして洗練されている。

製作者にはよほどの腕達者が撰ばれたと思はれるが、かま糸による手繡の繡技は驚く程に冴えてをり、他の撚糸や金糸による精巧にして繊細な種々の繡技も見事な技術的バランスを保っている。このすぐれ

た繡技と共に、糸色の配色も巧妙を極め六色或は七色の糸色を自由に駆使しているが、殊に金糸の扱い方がいい。糸色のやや繁雜に流れんとする時は強く金糸でしめくり、或は又、金糸で視覚的重圧を加えて布面の色調を調和させて格調の高い、しかも豪華な作品を完成している。ややもすれば低調に陥り易い刺繡作品に、かかる高い品格と芸術性が観得されるのは、すぐれた繡技と洗練された色彩感覚によるが、將軍御用と云う絶対的なものに対して製作者のきびしい態度も看過できないものだろう。保存よく伝はる興福院ふくさは、江戸ふくさの代表的優秀作品であり、類例の極めてすくない貴重な資料である。

二 東大寺図書館の厨子

厨子といえど誰れでもが神像や仏像や舍利塔をはじめとして信仰の対象物が納めてあるものを想像するだろう。現存している厨子の殆んどが信仰の対象物を安置していることからして、そのように考えられるのも無理からぬことである。

もともと、厨子の用途はいろいろとあり信仰の対象物を安置するのはその一つにすぎない。しかし、他の用途をもった厨子の現存品が非常にすくなく、ただ正倉院に伝はる三基の厨子が代表的なものである。その一つは正倉院宝物中でも最も由緒の深いものの一つである赤漆文櫨木厨子で、この厨子は天武、持統、文武、元正、聖武、孝謙の歴代にわたつて伝えられたことの知られるもので、これは天皇が常に御居間に置かれ、その中に難集、杜家立成、樂毅論などの巻物のほか、十合刀子、牙笏、紅牙撥鏤尺、白牙尺、刻彫尺八、雙六頭および子など

が納められてあつた。他の二つは、黒柿両面厨子と柿両面厨子と呼ばれるもので共に厨子の表と裏に両面開きの扉があり、中に一段の棚をつくり、台には香狹間形透かしの床脚がついている。この二つの厨子は赤漆文櫨木厨子の如く用途が判然としていないが、厨子の構造から推測して同様な用途にあてられたものであろう。

正倉院に伝えられるこれらの厨子と同様な用途をもつ厨子の作例は見出し難いが、いま、東大寺の図書館に伝えられている厨子は、構造は異つているが用途は正倉院厨子と同系統のもので、類例のまことにすくない厨子である。

東大寺図書館の厨子は木質黒漆塗り、両折両開きの扉をもつもので、高さ五尺二寸五分、間口四尺五寸、奥行一尺一寸八分。中には四段の棚を設け、大般若波羅密多經六百卷が納められる。扉の内側には大般若經の守護神たる十六善神の像が描かれてあり、大般若經を納める厨子で、書架の用途をもった厨子といえよう。

厨子の構成は台座、軸部、屋根の三部分からなる。台座は香狹間形透かしが前後各三、左右各一箇あり、高さ七寸二分五厘、間口四尺六寸八分、奥行は一尺三寸六分五厘で底板も上板も張らず幅二寸二分の木組である。四隅の上下には無文の鍍金金具が都合八箇つけられているが、現在は前面の左右の上下に残るのみ。台座の上部、即ち軸部ののせる場所の四隅には五分位の山形の突起をつくり軸部の安定をはかっている。

軸部は下から五寸四分の高さに前面は三箇、左右各一箇の香狹間を設け、それらを胡粉地にしてその上に緑青で唐獅子を一匹ずつ達者に

描く。正面中央の唐獅子は正面を向き、左右の唐獅子は相對する姿に描き、左右の側面は對照的な姿勢に描かれている。扉は両折両開きのもので、柱に左右ともに三箇の鍍金金具の蝶番でつけられ、扉の折目にも三箇の同様の金具蝶番でつけられてをり、扉の表面中央に押えの錠がありその少し上部にえび錠がつけられてある。扉の内面には十六善神の画像を可成り細密な筆で描く。内部は厚さ七分、幅一尺一寸の棚を四段設け黒漆塗。無文

第二図 東大寺図書館厨子

の鍍金金具が
香狭間のある
部分の四隅の
上下と正面の
香狭間の上下
に各二箇づつ
打たれている。
屋根は巾九
寸九分、長さ
四尺三寸の上
蓋をもつ巾一
尺七寸、長さ
五尺、高さ二
寸三分五厘の
屋根で、ゆる
やかな傾斜を
もっている。

第三図 東大寺圖書館厨子内部

この厨子
に納められ
てある大般
若波羅密多
經六百卷は、
高さ一寸五
分、縦一尺
一分五厘、
横一尺三寸
五分五厘の
黒漆塗りの
箱に、一箱
に十卷、つ
つ納め一段に
四かさね三列に置く。したがって、一段に百二十卷、五段で六百卷に
なるわけで、このような整理方法で納められている。
さて、この厨子の製作年代であるが、これは中に納められてある大
般若經六百卷の書写が完成した文保二年（一三二八）にこれを納める
ために製作されたものであろう。現在、大般若經六百卷は、縦八寸四
分、横二寸五分の折本仕立てになっており、一紙の長さ一尺七寸五分、
二十九行、十七字詰で何れもが書写されたものである。卷五百七十八
をひろげて見るとその卷末に、

文保二年戊午五月三日癸亥一行三礼而

書写畢為寺門繁昌弘法紹
隆勸六百人持齋戒令書写之
内也

願主前大僧正法印大和尚位 良信

これによつて大般若經六百卷書写の意図も判るし、六百人が動員さ
れて一人一卷を書写したわけで、良信みづからも卷五百七十八を書写
し文保二年に完成したことが知られる。良信は興福寺別当を嘉暦四年
までに前後四回もつとめた人であり、文保三年には一乗院の門跡をつ
とめている。彼の権勢において六百卷の書写もなしたことからして、
これを納める厨子の製作も容易に考えられよう。したがって、厨子の
製作年代は文保二年とみて間違はあるまい。

このような事情からして、この厨子は最初は興福寺に置かれていた
ものと思われるが、如何なる事情があつてか、明応七年（一四九八）
に東大寺に移されて保存されるに至つた。この間の事情は、良信書写
の卷五百七十八に別紙を追加し明記されてある。即ち、

明應七年戊午八月日以勸進買得之
東大寺戒壇院所寄附也沙門長悟
六十才

鎌倉期の厨子の遺作は可成り現存するが、何れもが信仰の対象物を
納める厨子であり、かかる用途をもつ鎌倉期の厨子の遺品はその類例
が見られないと云つてもいいだろう。台座や香狹間、屋根に可成りの
漆はげや損傷は見られるが、補修などは少しもなく概して保存も良好
で、鎌倉末期の作風をよく示している貴重な資料である。（守田公大）